

ゴースト・ハウス

2007(平成19)年6月8日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



第7章

バカバカしさ面白さは紙一重

監督＝ダニー・パン、オキサイド・パン／出演＝クリステン・スチュワート／ディラン・マクダーモット／ベネロープ・アン・ミラー／ダスティン・ミリガン／ジョン・コーベット
(東宝東和配給／2007年アメリカ映画／90分)

……法的には不良住宅の瑕疵担保責任が問題になる、定番の幽霊屋敷もの……？ 主役・製作・監督のビッグネームが話題を呼び、全米で公開されるや初登場ナンバーワンに！ ヒマワリ畑と多数の(?)カラスをうまく使った演出はさすが。そしてメインとなる、古びたゴースト・ハウスの中で、ヒロインは一体誰とどのような戦いを……？ 90分というコンパクトな物語の中に、「ゴースト・ハウス」のエッセンスがしっかりと……。

主演女優に注目！

この映画においてジュース役で主演したクリステン・スチュワートは、1990年生まれだから2007年の今17歳。彼女が一躍世界的な注目を浴びたのは、ジョディ・フォスターの娘役で出演した『パニック・ルーム』(02年)。その後彼女は順調に出世街道を歩み、山田洋次監督の名作『幸福の黄色いハンカチ』(77年)のハリウッドリメイク版『YELLOW HANDKERCHIEF』への出演が決まっている他、続々と出演映画が決まっているらしい。

一目見たら忘れられないというようなとびきりの美人ではない(?)が、目力を中心とした演技力は17歳とは見えないほどしっかりしたものだから、これからの成長が楽しみな注目株であることはたしか。もっともプレスシートのイントロダクションには「ポスト・スカーレット・ヨハンソンの最右翼に躍り出たと言っても過言ではないだろう」と書かれているが、これはちょっと気が早すぎるのでは……？ もう少し様子を見てみなければ……？

『パニック・ルーム』vs.『ゴースト・ハウス』……？

そんなクリステン・スチュワートが全世界から注目を浴びた『パニック・ルーム』は、そのタイトルどおり、高級住宅地にある大富豪のお屋敷だからこそ巨費を投じて設置された、鉄のフレームとコンクリートで固められ、外からは絶対に侵入できないという「パニック・ルーム」なる部屋がポイント。これが、都市問題、住宅問題をライフワークとする私の興味をひくことに……（『シネマルーム2』162頁参照）。

他方これとは逆に、売買契約における不良住宅の瑕疵担保責任が問題となった映画(?)が、『シネマルーム6』で「ワケあり物件に気をつけて」というテーマで取りあげた①砂と霧の家 (House of Sand and Fog)、②ホーンテッドマンション (THE HAUNTED MANSION) (『シネマルーム6』171~180頁)。さらに、『シネマルーム9』で「夢の新居についてきた、とんでもないオ・マ・ケ」というテーマで取りあげた、①『ダーク・ウォーター』、②『悪魔の棲む家』、③『おまけつき新婚生活』もそれと同じ（『シネマルーム9』365~381頁参照）。

そして今回の『ゴースト・ハウス』も、まぎれもなく瑕疵担保責任が問題となる映画だが……？

あのサム・ライミ監督がプロデューサーに

「あのサム・ライミ監督」と言っても、知っている人は知っているし、知らない人は知らないはず……。なぜあえてそういう言い方をしたのかと言うと、彼はあの『スパイダーマン』シリーズの監督だから。ちなみに、『スパイダーマン』(02年)と『スパイダーマン2』(04年)は全世界で15億ドル(約1800億円)をこえる驚異的な興行収入をあげているうえ、今年5月1日に全世界に先がけて日本で公開された『スパイダーマン3』も、公開早々100億円突破というすばらしい成績をあげている。

彼はその他にも『ギフト』(01年)などの作品を監督しているが、プレスシートによると、「2002年には、ハイ・コンセプトなジャンルの映画製作に専念するため」に、何とこの映画のタイトルと全く同じ「ゴースト・ハウス・ピクチャーズ」を設立し、そこで『THE JUON／呪怨』(05年)や『THE JUON／パンデミック』(07年)などを製作しているとのこと。一体いくら稼げば満足するの、という世界だが、そんなサム・ライミ監督が自分自身のプロダクションでプロデューサーとして製作したのが、

その社名どおりのこの『ゴースト・ハウス』。

そりゃ、その出来はともかく大きな話題となり、全米で公開されるやいなや、いきなり初登場ナンバーワンになったのもうなずけるというもの……？

監督は香港のパン兄弟……

この映画を観てプレスシートを読むまで全然知らなかったが、ハリウッド進出第1作としてこの映画を監督したのは、『レイン』（02年）や『the EYE [アイ]』（03年）で世界にその名を知られたダニー・パンとオキサイド・パンとのこと。彼らは1965年に香港で生まれた双子の兄弟。私はこの両作品とも観ていないから何とも評価できないが、『the EYE [アイ]』のリメイク版をめぐる争奪戦が起き、その結果トム・クルーズが取得したとのことだから、かなりの出来なのだろう……。

ちなみに、兄のダニーは『インファナル・アフェア』3部作（02、03、03年）の編集をしているとのことだし、パン兄弟は目下ニコラス・ケイジの製作、主演で『レイン』のリメイク版の監督、脚本を手がけているとのことだから、その才能はかなりのもの……？ 香港の監督といえば、今やすっかりハリウッド映画の大家になってしまったジョン・ウー監督が有名だが、若い才能ある監督もやはりそれに続いているわけだ。もっとも、1997年の中国本土返還以降、香港の中国本土化が進み香港映画はえらく低調だが、香港ではパン兄弟に続く才能は続いているの……？

舞台はノース・ダコタ……

『ゴースト・ハウス』というわかりやすいタイトルをつけた以上、それがどこに建つ、どんな建物なのかが、この映画が成功するか否かの勝負どころになることは明らか。ちなみに『ホーンテッドマンション』はバカでかいお屋敷だったし、逆に『ダーク・ウォーター』はマンションの一室だったから、両者とも参考にならないもの。なぜなら『ゴースト・ハウス』は、人里を離れ、携帯も通じないような田舎にある広大な土地に建つ一軒家なのだから……。

主人公の長女ジェス（クリステン・スチュワート）とその弟ベンそして父親のロイ（ディラン・マクダーモット）と母親のデニース（ベネロープ・アン・ミラー）が、シカゴからノース・ダコタ州にあるこの農場に引っ越してきた理由は2つ。その1つは失業中のロイがヒマワリ栽培によって生活の立て直しを図ったこと。そしてもう1

つは、3歳になってもなぜか言葉を話せない弟ベンと、年頃になったせいか(?)心因性の問題点を抱えて両親との折り合いが悪くなったジェスには、都会の喧騒を離れ静かな田舎生活が望ましいと考え、家族全員がその方向で一致したため……。

ちなみに、ノース・ダコタ州は日本の約半分という広い国土ながら、そこに住む人口はたった65万人という超田舎の州。そんなノース・ダコタ州に建つ古いけれども広くて立派な家を気に入り、明日からは新しい生活が、と家族全員が願ったのだが……。

気になるのはカラス……？

「カラスなぜ鳴くの、カラスは山に……」と歌われる『七つの子』はよく知られている国民的童謡だが、あの全身真っ黒なカラスの姿は不気味だから、どうしても縁起が悪そうなイメージになってしまう。引っ越ししてきた当日、私がジェスとともにちょっと気になったのが、屋根の上にとまっている数羽のカラスたち……。

ちなみに、私は日曜日の朝はいつも自転車で中之島公園を横切って淀屋橋駅まで行き、難波のフィットネスクラブで運動しているが、先日は中之島公園の橋の欄干にとまっている数羽の真っ黒なカラスの姿をみてビックリ。近くで見ると、結構図体もデかく不気味なもの……。ひょっとして、地球温暖化という気候変動や、さまざまな環境悪化がカラスの増大を招いているのでは……？

もっともそんなイメージだからこそゴースト映画にはカラスがよく似合うことに……。プレスシートによると、この映画で大きな役割を果たすカラスは、チェコから運び込まれたオオガラスで、合計25羽。オタ・バレッシュというプラハのトレーナーが所有し訓練しているこの25羽のカラスを、さも何千羽もいるかのように見せるのは特殊な視覚効果によるものらしいから、すごい。ちなみに、ロイのヒマワリ畑を手伝うことになる、流れ者の農夫ジョン(ジョン・コーベット)は再三銃声でカラスを追っ払うものの、1匹のカラスも撃ち殺さなかったのは、そういう事情によるもの……？

ベンには見えても……？

大人の目は曇っているから大人には見えなくても、純真無垢な子供の目には見えるということはよくある話……？ とりわけ3歳の弟ベンは口が利けないだけに目の方はよけいにしっかりしていたのかも……？

母親のデニースは、壁についていた大きなシミが1度洗ったのにまた発生していることに、イヤな思い、不思議な思いをしながら別に気にとめなかったが、どうも3歳のベンには、この「ゴースト・ハウス」の中に住む幽霊たちの姿が見えていたよう……？

そんな幽霊たちは、両親が町へ買物に出かけゴースト・ハウス内にジェスとベンの2人だけが残った時、ちょっと牙をむいてひと暴れたものの、それはどうも新たな入居者のお手並みを拝見しただけだったよう……？ おまけに、幽霊たちのそんな気まぐれ(?)のおかげで、幽霊を目撃したといくら説明しても、両親にも警察にも信じてもらえないジェスは、今まで以上に信用を失う羽目に……。

ロイの助っ人ジョンは……？

ある日の作業中、カラスに襲われたロイを銃声によって助けてくれたのが、リュックを背負い銃を片手にヒマワリ畑を通りかかったジョン。人手が欲しいロイは給料は収穫時に支払うという条件でこのジョンを雇ったが、ジョンは働き者で性格もよく、スンナリ家族の中に溶け込んでいった。したがってロイのヒマワリ栽培は順風満帆のように思えたが……。

『ゴースト・ハウス』という映画ではみんながハッピーになれるはずはないから、やはりこのジョンが物語の後半においてキーマンに……。そこで、ロイの助っ人であるジョンは、映画の後半一体どんな役割を……？

ジェスの助っ人ボビーは……？

他方、父親と一緒にジェスが町に買物に行った時に知り合った地元の高校生が、ボビー(ダスティン・ミリガン)。この映画はホラーものだから、2人の間に純愛が芽生えるわけではなく、ボビーはあくまでジェスの助っ人としての役割を果たすだけ……。

ロイたちが引越してきたのは実は「ゴースト・ハウス」だった。そして、その中に住む幽霊たちがそれまでの小出しの活動をやめて突然牙をむいたのは、ジェスがボビーと共に町の飼料店を訪れていた時。地下室の中で発見したロケットペンダントの中に写る女性の姿をヒントに、ジェスが飼料店で発見した驚愕の事実とは……？ ジェスはボビーと共に直ちに「ゴースト・ハウス」に引き返したが、そこでボビーは助

っ人として一体どんな役割を果たしてくれるのだろうか……？

姉齒事件を契機に新立法が……

2005年10月に突如発生したヒューザーと姉齒元1級建築士による耐震強度偽装問題は、わが国の建築行政の根幹を揺るがす大問題となり、第1弾、第2弾にわたって建築基準法と建築士法そして建設業法と宅建業法の改正という手当てがなされた。そしてその第3弾となったのは、今年5月24日の「特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律」（履行確保法）の制定。

従来は、不良住宅の販売に対する民事上の責任は瑕疵担保責任にもとづく損害賠償が中心だったが、ヒューザーの例をみれば、販売主が倒産すれば、いくら損害賠償を命ずる判決を獲得してもその実効性がないことは明らか。そこで要請されたのが、車の自賠責保険と同じような強制保険。つまり住宅を販売する者に、保険への加入を義務づけるという制度の構築だ。

今回成立した「履行確保法」は、新築住宅に限定して、住宅の販売者および建築工事の請負者に住宅販売（建設）瑕疵担保保証金の供託、もしくは保険加入を義務づけるという画期的なもの。その詳細は今年7月に出版される、私の『建築紛争に強くなる！ 建築基準法の読み解き方—実践する弁護士の視点から—』（民事法研究会）を読んでもらいたい。私の映画評論の読者には、是非そんな点にまで興味と関心を持ってもらいたいものだが……？

2007(平成19)年6月9日記